

第3章 部活の思い出

千葉工野球部奮闘記

千葉工野球部OB会 名誉会長 石井 進 (24E)

昭和15年7月24日、第26回全国中等学校野球大会の千葉県大会が開幕した。初参加である我が母校は湯浅政彦将(16C)を先頭に「見苦しい負け方はしないぞ、練習不足を精神力で補おう」と千葉寺球場での開会式に臨んだ。

「若き熱と力の火花けふぞ開く球宴13チーム制覇へ奮進(バクシン)」(当時の千葉読売より)第一試合のため、立田千葉県知事の試球式(始球式)を受けた後、優勝候補の千葉中(現在の千葉高)と対戦した。翌日の新聞には「劈頭(ヘキトウ)大番狂わせ初陣千工、千中を下す」の見出しで報せられダークホースぶりを発揮した(4x対2)。現在活躍中の部員の皆さん、草創期に、このような偉業を成し遂げた先輩たちによって基礎ができ、今日があることを肝に銘じ努力しようではありませんか!

さて、若き血潮をみなぎらせた野球も、第二次大戦の拡大とともに敵性スポーツとみなされ、全国大会は第27回をもって中止となった。

野球場は開墾され芋畑になり、更に学徒動員令により、学業を離れ軍需工場勤務が続いた。昭和20年8月15日、ポツダム宣言受諾により終戦。茫然自失した世相の中にあっただが、新生日本の再建に燃え、翌21年7月には4年間中断されていた全国中等学校野球大会(第28回復活大会)に市川地区の代表権を得て県大会に出場、準決勝戦で成田中に敗れはしたが、悪条件を克服しての快挙であった(監督・勝宗平先生)。

昭和22年は、改修された県営千葉寺球場で、銚子商業と対戦。必勝を期し帽子の上にハチマキを締めて臨んだが涙をのんだ(監督・成田正男先生)。

津田沼校舎は、鉄道連隊の資材倉庫と演習場であったため、砂利が敷き詰められた上に多数の蝸壺があり、背丈程に伸びた雑草で覆われていた。野手が穴に落ち込むという想像もつかない事が起きたが、整地作業をしながらの猛練



昭和21年7月13日市川地区代表となった時
(中央:北村 丘校長)

習に堪え忍んだ。復興に燃えた学校は、野球部の活躍を全校応援で臨んでくれたので、ますます闘志が湧き出たのを覚えている。

昭和23年の教育制度の改革により、名称も「高等学校野球選手権(第30回)大会」となった。記念すべきこの大会で「東葛・船橋地区」の代表権を得て再び県大会に出場、匠瑳・成東を制し、準決勝へ進出した(監督・飯田忠良先生)。

昭和27年(第34回)大会は関東高校(現在の千葉敬愛高校)を逆転で下し、初の南関東大会出場権を得た。

昭和40年(第47回)大会ではBゾーンの県代表となり、東関東大会で日立一高に惜敗するも球史に残る戦績をあげた(監督・笹森寿夫先生)。

生実校舎に移って10年、実力をつけた野球部はシード校となり、常に大会を盛り上げてくれた。昭和53年秋には準優勝し、選抜をかけての関東地区大会に出場、甲子園まであと一步と迫った(監督・森川和先生)。

今、伝統を継ぐ部員諸君に望みを託しエールを送り、更なる発展と願っている。

部活の思い出

野球部 北総地区 卒業生(37)の親睦会

新井 昇 (37E)

私は昭和37年電気科卒業の元野球部出身です。私たち37年卒の野球部出身者は仕事のことも卒業しており、現役野球部の大会等の応援に駆け付けて、帰りに応援にいけない者も含めてちょっと一杯で旧交を深めています。その他にも誕生日の近い者に合わせて2~3回の親睦会を開いております。学生時の思い出、家族のこと、孫のことを含めてアルコールを飲み干して楽しく過ごします。

頻繁に出席するメンバーは、私新井(E)、キャプテン河野(C)、マネージャー石川(C)、同クラスの岡田、同じく田中(E)、女房役の増田(C)、中島(C)婿に行つて江尻、山本(C)の8名です。

他に野球部出身者は藤松、早川、宮崎(篠原)松丸、坪田。他にも居たと思われるが3年の最後まで在籍していたかは定かでない。

当時は、バックネット前のダイヤモンド内の小石を皆で拾い、レフトではラグビー部、ライトではサッカー部と競

合で練習していた。今はグラウンドも津田沼校舎も無いのが寂しいが……。

懇談の中で1年後輩の部員と同席した人から一緒に同席出来ないかとの意見が出たので、どうだろうかと言う話があり検討しようと思います。

同年代の仲間、1~2年上下の仲間で賛同される方連絡をお待ちします。

連絡責任者は、当時キャプテンの河野君が担当します。

●電話 043-275-8333

●メールアドレス inagenkohno@ybb.ne.jp



左から岡田、河野、中島、増田、新井、石川、田中

母校サッカー部の回顧について

山本 敏雄 (27C)

「若者は未来を・年寄りは過去を語る」と言われます、八十路を歩むOBとして母校のサッカー部を取り巻く過去的一端について語ります。

昭和22年にGHQの指導でクラブ活動が奨励され母校も蹴球部(サッカー部)として始動した。当時、県大会は5校(千葉医大・千葉師範<現、千葉大教育学部>・千葉中学<現、県立千葉高校>・千葉商業学校<現、千葉商業高校>・千葉工業学校<現、千葉工業高校>)で会場は千葉医大グラウンドがメインであった。

その後、県下各地区で次第に創部(長生第一高校・佐原高校・安房水産高校)され、サッカーが普及した。

千葉県高校サッカーのはしり 6校==安房水産の創部記念に招待され館山市での合同合宿は印象深い==

当時は母校の体育科教諭(遠藤先生)の指導で練習を重ね、夏休みの合宿には慶応大学の現役選手2名を招いて慶応スタイルの戦術を習得した。

昭和25年には県代表として南関東大会(東京三鷹市)に出場して小田原高校に敗退した。この時オーバーヘッドキックを初めて知った。

サッカー部のOBは進路先でもサッカーを継続する人が多く、OB会の設立機運が高まり母校の住所である久久田(津田沼とは谷津の津・久久田の田・鷲沼の沼)に因み「久久田クラブ」と命名して現役とOBの絆とした(昭和42年母校移転で解散)。

昭和37年から千葉県社会人大会と江東五区大会(東京都の東部地区)に加盟した。

特に、江東五区大会では数年に亘って優勝したものの、所在地が千葉県習志野市である事から問題提起され、江東区亀戸に所在地を置き、チーム名は大島クラブとして継続参加した経緯がある(大島クラブは会員の高齢化で、数年後に解散)。

年号は平成と成り、「千工サッカーOBの集い」と称して年間3回、ミニサッカーや健康ランドでの入浴・食事会を行なってはいるが、参加者は津田沼時代のOBのみで全員65歳超であり、65歳未満のOBとも親交したいのが正直な心境である。



中央 筆者

サッカー部 津田沼時代

佐川 一 (32C)



入学して、20日間位するとサッカー部の先輩から突然呼び出され「お前緑中だろサッカー部に入れよ」と強く言われ返事も出来ずにもじもじしていたのを思い出します。この威圧的な言葉を2~3日繰り返され入部したと記憶しております。

入部して驚いたことは、グラウンドの使用面積は野球場が7割、残り3割はラグビー部とサッカー部で半々、グラウンドは石ころだらけ、サッカー部の練習場は半面以下、時々自動車部のトラックがクラクション鳴らし走行するし、これでまともな練習が出来るのかと当時は思いましたね。

ボールは古く革が伸びて一廻り大きい感じ、予算が少ないからすぐには買えないからよく磨けと、気合入れられ、せつせと磨いたり、支給されたユニホームは洗濯してないためか汗臭く、部屋は板張りの内部が穴だらけ、40ワットの裸電球1個、兵舎跡と聞いていまし

たが常にダニに囲まれてる感じで慣れるまで大変でした。

入部当時は部員が少ないせいか数日後左ウイングのレギュラーに選ばれ、実戦練習。気が付いた事は先輩の動くスピードが速く自分の体力のなさを痛感。試合に出てもあまり活躍できず無我夢中の1年生でした。

例年夏休みに入ると大会に備え1週間合宿に入ります。朝から体操、マラソン、柔軟体操、腹筋、シュート練習の繰り返しで、今思うと炎天下によくやったなと思いますね。

今も特に思い出す事は足腰が疲れた状態でトイレに入り、出る時に足がつりすぐに立てず、トイレ内で唸っていた事、大事な試合に出れば後半疲れて足が全然動かず、情けなく、程々鍛えれば余裕で試合に臨めるのにと当時は心の中で思ったり。当時の運動部員は皆身体を鍛えればよい結果が出せると勉強もあまりせず、純真な気持ちで練習に明け暮れて居たことが懐かしく思い出されます。

部活の思い出 ラグビー部

中村 勇三郎 (38M)



私の父は千葉一高出身の為、同じ高校を望んだが、私は同レベルの千葉工を受験、中学時代にラグビー観戦をし、絶対にラグビーをしたいという気持ちが強く入部。当時の校舎は津田沼で茂原・姉ヶ崎等、随分遠方から通っていた学生が多く、夕方遅くまで練習をしてからの帰宅は今振り返っても大変だったと思う。

監督の梅山先生は自主性を重んじつつも、とにかく良く走らされた。

梅さんは在任3年間で2度も我々を全国大会へと導いて頂き感謝している。以来私はトヨタ(2年)、法政大学・リコーと常に日本一を争うチームへ所属し得た事を有難く誇りに思っている。

梅山先生・同期生とは家族同士の繋がりが出来、半世紀になるラグビーで私は一生の友を得たと感謝している。

ラグビーは、ワンフォアザオール・オールフォアザワンの言葉に代表される素晴らしい競技。全国大会4回出場を誇る本校です。

プライドを持ち研鑽を積んで、古豪復活を果たされん事を祈念しています。



梅山先生が亡くなられて10年、墓参の後、師が懇意にしておられた伊香保の宿で奥様とご御子息と

テニス漬け3年間の思い出

小安 秀次 (38M)



昭和38年3月、母校千葉工業高校を卒業して早や半世紀余りが過ぎ、過去の多くの出来事がセピア色に霞み、記憶から消え去ってしまう年齢に差し掛かってしまいました。しかし誰もが輝いていた懐かしい青春時代の思い出、私はとりわけ高校生活の3年間で忘れることがありません。

あの頃の日本経済は拡大期にあり、我が千葉県は臨海部に続々と大手企業の工場進出が進んでいました。そして、多くの生徒はこれらの企業で中核を担う夢を持って勉学に励んでおりました。そんな中、楽観的な性格の私は部活のテニスで明け暮れる日々を過ごしておりました。昼は早弁で済ませて、又、度々授業を夢の中で過ごし、放課後は真っ先にコートへと向かっていました。

のです。

津田沼校舎は鉄道連隊宿舎の跡地でしたので屋外のグラウンドやコートは砂利が散見される状態でした。テニスコートも同様でしたがローラーを掛けて整備されておりましたので、冬季の降霜時を除けば支障はありませんでしたが、一面しかないコートでは部員の皆が十分な練習時間を持つことはできませんでした。そのような状況下でしたので良い成果を挙げる事が出来ませんでした。

最終学年になり私が部長に任じられたのを機に、良い成果を上げたくて練習の強化を試みることにしました。冬季はコートを使用できない日が多くありましたので、基礎体力向上を図る為、大久保にあった順天堂大学までのランニング、又、それまでの対外試合で知己を得た他校との練習試合を多く取り入れてみました。残念ながら思うような成績を上げることなく終わってしまいました。

部活の思い出 バレーボール部

須田 康雄 (36E)

私の入学は津田沼校舎で、兵舎の面影が残る学校でした。当時のバレーボール部の監督は高野先生だったと思います。部員は15名程度でまだ9人制の時代でした。

私は中学時代に陸上競技部とバレー部に所属していた関係で先輩からバレー部に勧められ入部しました。バレーコートは一番奥の新京成線側にテニスコートと並んで在り、晴れると石拾い、雨が降れば水かきをしたものです。

私は身長が低いのでポジションはハーフセンターかバックセンターでした。当時の県大会は、千葉一高、東葛飾高、安房一高などが優勝を競っていた。千葉工業は2回戦止まりで敗退が多かったように思います。

当時の千葉工業の部活動は、サッカー部、ラグビー部が活躍しており、全国大会に出場したこともありました。

バレーボール部の思い出を頭に浮かべようとしたが、七十過ぎの私にはあまり浮かびません。



ボクシング部 部活あの日頃

齋藤 弘 (36M)



私は、1年生の時は剣道部に入りましたが、すでに中学校の時から剣道をやっている有段者が結構いて、顧問の先生は、その人達に力を入れ我々素人に対し、あまり面倒を見てくれませんでした。それでも毎日頑張りました。また、正月明けの寒稽古では、姉ヶ崎駅から1番列車に乗って、凍る様な寒い中を1週間頑張ったこともあります。

私の家は農家で、小学生の頃から家の手伝いをしていたので、腕力には相当な自信が有りました。1年生の体育の時間に鉄棒の懸垂をやる授業があり、70回を過ぎた頃に先生が「齋藤もういいから止めてくれ」と言われて、78回で止めたことがありました。又、剣道部は1年でやめ日頃からどうせやるなら他の人がやっていないことに挑戦したいと思い2年生からはボクシング部へ入部しました。当時、千葉県下で高校でボクシング部の有る学校は、非常に珍しい存在で千葉工業、習志野高校、船橋高校、佐原高校だけだったと思います。

ボクシング部は、使われていない古い校舎の一室で、サンドバック、パンチングボールが部屋の隅に吊るしてあるだけのお粗末な所でした。リングなどはとても望むすべもない雰囲気、部員も各学年4~5人の生徒が所属しているだけでした。

顧問の先生は、素人で技術的なことを教えていただくことは全くありませんでした。先輩(3年生)から教えられ最初はジャブの練習から始め、右手で顔面をガードし、左手でジャブを真っ直ぐに繰り出す練習の日々でした。その練習が終わると今度は、足を鍛えるためのランニングです。習志野自衛隊基地を回って帰る約10kmのコースです。最初は、先輩に付合われていた感があって大変に辛かったことを覚えています。慣れてくるとそうでも無かったのですが、良く指導してくれた先輩と2人で雨の日を除き毎日走りました。

ランニングから帰ってくると今度は、腹筋を鍛える運動です。長椅子を平行に並べ、それに足を引掛け、頭の後ろに手を組み、上体を上下させる例の腹筋運動、最初の頃は、10数回しか出来なかったが、そのうちに100回をノルマとしてやれる様になりました。最高では、150回やったこともあります。その頃になると腹筋が固く締まって、筋肉の3段階腹になっていました。(今では、脂肪の3段階腹ですが！)

ジャブ打ちがどうか様になってくると、足を止めてのワンツーパンチの練習。特に右のストレートを素早く、ひねりを加えて、真っ直ぐに打ち抜く練習を毎日やりました。足を止めてのワンツーが打てるようになると、今度は足の動き(フットワーク)を入れた練習。右に左に動いてのワンツーパンチ、前に踏み込んでのワンツーパンチ、バックステップしてのワンツーパンチ等です。それもどうか恰好になってくると、今度は仮想の相手を考えてのシャドーボクシング練習です。試合形式の3分間動いて1分間休む(ラウンド形式)のインターバル練習を数ラウンドやりますが、手足を同時に動かす動作に慣れていないこともあり、直ぐに息が上がり、ノドが乾き、非常に疲れます。毎日走っているのにどうしてだろうと思ったことを覚えています。シャドーボクシングがどうか様になってくると今度は、実際に相手を付けてのスパarring練習に入ります。

この頃には、2年生も2学期の後半から3学期の前半になっていたと思います。

私の階級は、その頃の体重からバンタム級が良いと云われていました。ところが同級の選手が少なくしばしばウェルタ

一級やミドル級の人達とスパarringをやらせられ、やはり級が違うことや1年生の時からやっていると経験豊富で有ることも相まってコーナーに追いつめられることが多かった。しかし、私が2年生で始めた時に1年生から始めた同級の選手とのスパarringでは、得意の右フック(ハンマーパンチ)でダウンを奪うこともしばしばあり、しばらくすると1年生は私とのスパarringを敬遠することが多くなったようでした。

練習を1年間やり、いよいよ3年生の春の県大会に出場することになり、この頃の私の体重は、バンタム級の上限54kgを1~2kg上回っていました。大会直前の旧校舎に泊まった合宿では、津田沼の銭湯で長湯をして汗を流し、苦勞して減量をしました。専門のトレーナーが付いているわけでもなく、がむしやりに汗を絞り出し、水さえ飲まず、飲食を極端に抑えて、ふらふらの状態になったことを鮮明に覚えています。それでも筋肉質になっている体は、なかなか減量出来ず、どうにかこうにか頑張ってリミット一杯まで下げることが出来ました。

こんな状態だったのですが、いよいよ県大会でデビューすることになり、試合当日は、午前中の比較的早い時間に計量を終え待機していたのですが、どう過ごしたかあまり覚えていません。ただ、水が飲めるようになったことが大変嬉しかったです。

先生から「もう直ぐ試合だよ」と告げられ、思わず武者震いし、編上げ靴を履き、テーピングをした上にグローブを付け、マウスピースを口にし、ヘッドギアを付けて1回戦に臨みました。四角いロープに囲まれ、マットの敷かれた正式のリングに上がるのは、勿論初めてです。

高校生の試合は、3ラウンド制で3分間戦い、1分間休むバターンでこれを3回(ラウンド)やります。

生まれて初めてのリング上で、生まれて初めての試合に臨みましたが、審判に中央に促され、相手と中央でグラブを合わせました。覚えていたのは、ここ迄です。1回戦の相手が誰で、どう戦ったかも全く意識が無く、無我夢中で戦い、アツという間に11分間が終わりました。ノドがやたらに乾き、あんなに鍛えたにも関わらず、足が全く動きませんでした。結果は、幸いにも判定勝ちでした。

2回戦は、桜井選手です。その頃から相当有名な選手で、4年後の東京オリンピックのバンタム級で金メダルを取った選手です。残念ながら世界チャンピオンには成れなかった人です。3~4年前に他界しました彼は、ボクサータイプ(足を使って、打っては離れる)で、私はファイタータイプ(接近し内に入って打ち合う)です。また彼は、試合経験豊富ですが、こちらは素人同然です(勿論この時にはこんなことは、知る由もないことですが…！)。

第1ラウンドの最初の方では、打合いに出て来ましたが、私の右フックが一発当たるとそれからは、パンパンとジャブとワンツーを撃っては足を使って離れ、私の攻撃は、フットワークでかわし、あまりダメージを受けるパンチでは無いのですが、確実にポイントを稼ぐ試合巧者でした。そんな訳でたちまちの内に3ラウンドが終了しました。結果は、判定負けとなりました。

試合後は、悔しいとか残念とかの気持ちは全く無く、もっと試合経験を積んで戦っていれば、ちがう試合展開になっていたであろうと感じました。

もし、私のラッキーパンチが敵の顔面を捉え、私が勝っていたら、私の人生は大きく変わっていたであろうと思える55年間です。(勝たなくて良かった…?) カーン試合終了です。

部活の思い出 陸上競技部

飯嶋 敏夫 (38C)

昭和34年夏、全国中学陸上競技千葉県大会3km、レース後に吐くまで頑張って3位。陸上競技に限界を感じ、卒業後の就職先を考慮し、通学往復5時間の千葉工業高校に入学。入学後、中学時代一緒に競った仲間がインターハイで活躍している事を知り、陸上部に入部。

部室は窓ガラスが割れ、板張りの壁は所々穴が開き、雨漏りもしていました。またスパイクでは満足に走れないほど小石の混じったトラックを、毎日暗くなるまでの練習開始。

帰りは学校から津田沼駅まで、そして千葉駅構内では、銚子行きへの乗り換えホームをダッシュの毎日。時には疲れて走れず、定刻に出発した列車の赤いテールランプ見送り、一人寂しく構内の30円のかげそばで空腹を凌ぎ、次の列車までベンチで1時間待ちました。

京都を目指す駅伝大会では一区10kmを3年間、高校3年の時は県代表として、5kmでインターハイ関東大会に出場。3周目迄は「現在トップは千葉工業高校飯嶋選手」と

のアナウンスを快く聞きながら走りました。

授業の予習復習は全て汽車の中で済ませ、就職は募集企業の中で初任給が一番高い(1万9千円/月)A社を応募、面接官に「5kmでインターハイ関東大会に出場」と答え採用が決まりました。



陸上競技部

齊藤(旧姓高橋) 貞夫 (36E)



およそ55年前のことを思い出して書くにしても、当時、華やかなラグビーや野球部と違い校舎と実習場の間の小さいグラウンドで部員7名位が淡々と走っていただけで、一緒に活動した部員や先生の名前も陸上の記録も思い出すことができません。部というより同好会的な雰囲気でした。

県の陸上大会では予選止まりで傑出した部員はいませ

んでした。また、高校駅伝は、県営競技場から土気の往復で行われ約40チームの内、20数位と記憶しています。

良かったことは、校内マラソンで上位に入れたこと、基礎体力ができたこと、体育の点数が高得点だったことです。

陸上部はもうないのではと思い、学校にお伺いしたら現在も部員は8名いるとのことで安心しました。私たちができなかつたことを、後輩たちが記録的な活躍ができることを祈っています。

剣道部 部活動の思い出とその後

鎌形 武久 (33C)

昭和30年4月、私が剣道部に入った時は、全日本剣道連盟が復活して間もなかったため、県下でも剣道部のある高校は少なかった。部室には撓競技の袋竹刀や戦時中の銃剣術の胴、竹製の胴などが残っていた。部員の多くは部の剣道具で済ました。

当時、錬士6段の石川先生が顧問で、私は2年生の時、県大会の団体戦に次峰として出場し、準々決勝でAシードで強敵の成田高校を接戦の末、4勝3敗で破り、初めて3位に入った。

また、3年生の時、第1回千葉県・東京都高校剣道親善大会は、両方の中間距離にある母校(津田沼校舎)で実施された。千葉工業高校からは、武藤君、岩瀬君、私の3人が選ばれた。40試合の結果は千葉県が、大将戦を制して21勝19敗で勝った。(私もストレート勝ちし、1勝に貢献)

剣道は、仕事の関係で何度も中断したが、定年まで続け(錬士5段)、転勤先の各地で少年剣道の指導にあたった。1997年、仕事の派遣先で行われた、シンガポール東西剣道

大会では現地の剣士に混じって、名誉ある東軍の大將に選ばれた。

剣道で培われた「気合いと大声」は人生の苦難を乗り越え、今でも紙とんぼの指導などに活かされている。



昭和32年
第1回
千葉県・東京都親善
剣道大会
(筆者真中)

山岳部 私の国民体育大会

工藤 轟 (28E)

私が千葉工業高等学校山岳部に入ったのは、二年生になってからで、南アルプス、丹沢を主に活動していました。

三年生の時に第7回国民体育大会（昭和27年10月19日から23日）に参加いたしました。

高校生の参加条件は県下で1名でありましたが、当時、山岳部のあった高校は、千葉工業高等学校、千葉第一高校、千葉女子経済高校の3校が活動しておりました。

各大会等に参加する学校の決め方は持ち回りで行っており、丁度今回の当番が千葉工業高等学校でしたので参加することができました。

千葉は第5回国民体育大会からの参加で、第7回国民体育大会は地域大会（福島県、宮城県、山形県）で、山岳の部は鳥海山（2,230m）でありました。前夜祭は、酒田市が提灯行列で盛大に祝ってくれた事を、今でも心に残っており目頭が熱くなったことを思い出しました。

翌日は、参加者全員が鳥海山の山頂を目指して、

一步一步しっかりと大地を踏みしめながら登頂いたしました。山頂からの眺望は格別なものでありました。

夕方には、全員がケガもなく下山し仙台を回って千葉へ帰ってきました。後日、千葉に参加点が1点入ったそうです。

その後、第10回大会からは、都道府県単位の開催となり第18回大会から表彰されるようになり、さらに第33回大会からは得点種目になったようです。

その審査項目は、（1）体力（2）歩行技術（3）マナー（4）チームワーク（5）生活技術（6）服装・装備（7）観察研究の7項目でスポーツとして、選手として認められたように思います。

私は、山岳部に入部できたことで、高校生活は本当に楽しかった——の一言に尽きます。

卒業後は、地域の社会活動に生かし80歳を過ぎても楽しんでおります。

山岳部OBのつぶやき

香焼 正利 (38E)

地域の老人会の三峰講は、毎年秩父の三峰神社への参拝を続けています。その一員の私はバスが秩父に入ると50数年前の山岳部時代に初めてリーダーとして登った雲取山を必ず思い出し、車中で話しながら花を咲かせています。

放課後、登山装備を整え重いザックを背負い雲取山を目指す。秩父鉄道三峰口駅で下車、河原にテントを張る。小石が背中に当たるテントの中で夜遅くまで語り合うのも楽しさの一つでした。

早朝出立、急登を過ぎると三峰神社の裏に出る。当時の参拝者は境内までケーブルカーを利用し（現在ケーブルは廃止）賑わっていた。

苦しみながら登りつめた雲取山頂ではわずかな休憩で奥多摩へ下山。苦しかったコースも下山駅に着くと次の山行を話し合う頼もしい千葉工山岳部の仲間たちがいつも側にいた。

3年の時の谷川岳での全国大会出場は良き思い出となりました。



全国大会の開会式



八ヶ岳での夏山合宿

部活の思い出 柔道部

村上 順一 (40M)

卒業して早や50年、当時の部活（柔道部）の思い出を何か書いて欲しいとの依頼を受けた。いざ書こうとするとなかなかまとまらず非常に難しい作業となった。依頼通りの内容になっているか不明だが思いつくままに書いてみたい。

自分の時代は津田沼校舎であった。教室はもちろん道場も古いものであった。正門を入れて少し行った左手にあり、その景色は今も憶えている。現在の生実校舎になっても10年近く夏合宿や折々の練習に参加させてもらった。合宿所もあり、道場も我々の頃と違い練習環境に雲泥の差を感じたものである。

合宿といえば、当時は道場に雑魚寝であったが自分は校舎2階の教室へ毛布を運び1人で寝ていた。静かで涼しく、よく寝られたが朝練の時間に遅れないように注意する必要があった。

練習はそれなりにきつく、当時は補強運動に「うさぎとび」もあり体重もある自分には特にきつかった。また練習中は水をのむことが出来ず今では考えられない。現在も柔道の指導もしているが練習の間に休憩を入れ、水分補給も充分行ない、体調には注意している。

試合(大会)の思い出は、2年生の時に関東大会に出場することが出来た。埼玉大宮での大会であったがこの時の記憶は試合よりも大会当日の朝食時に先輩から「選手は生卵を2ヶ飲み」と言われたことがある。なかなか飲むことが出来ず、醤油をまぜてやっと飲みこんだことを憶えている。効果があったかど

うか何とも言えない。試合は予選リーグ（群馬大田工に勝ち埼玉春日部に負け）で敗退した。

校内での練習は当然であるが他校との合同練習も行なった。特に習志野高とはお互いの先生が大学の同期でもあり、学校も近かったのでよくやったものである。当時習高は京成津田沼駅の先にありお互いに走って練習に行った。合同練習を通して他校の生徒とも友人になっていた。これは卒業後も同じ柔道をやった仲間として広がっていった。

入部した時は30～40人いた仲間も卒業時には8人となっていた。今はどの学校も入部するものが少なく試合が出来ない学校も多くあるようだ。

社会人になって会社で柔道を続け実業団の大会にも出ていた。学校の後輩も何名か入社して活躍してくれた。今も柔道にかかわりいろいろやっているのも高校時代の部活がその原点であり柔道を通して知りあった仲間に感謝している。



部活の思い出

吹奏楽部OB 千葉工の誇れるもの「千工マーチ」

菅澤 功 (39M)

千葉工業高校には二つの誇れるものがあります。

第一には校歌が三つある事です。「検見川」「津田沼」「生実」校歌です。十年程前同窓祭で生実校舎に訪問した折、同窓祭の締めで恒例の校歌斉唱が有り、校舎の場所が三か所に替わった事は知っていましたが、校歌が三つ有る事をその時初めて知りました。他校では在りえない事は勿論ですが、先輩達が各々の校歌を熱唱される姿に感激しました。伴奏は現役・OB/OGの吹奏楽部員です。

第二には「千工マーチ」の存在です。荒川一郎先生(千葉工高在任期間、昭和25年4月～昭和35年3月迄の10年間)が※昭和27年吹奏楽部を12名の新生で創設され※その後「千工マーチ」を作曲され現在に引き継がれ演奏されています。私事です昭和36年千

葉工に入学、新入生歓迎演奏会に感激し吹奏楽部に即入部しました。「千工マーチ」のパート(バリトンという楽器で今のユーホニウムより小型で音域は同じ、現在はあまり使用されていない)楽譜は手書きで、まだ荒川先生の筆跡が残っていました。

その後荒川先生は京葉工高教頭、昭和38年茂原工高の初代校長に就任されましたが、同年にご逝去されました。荒川先生追悼演奏会は茂原工高・千葉工高合同で千葉市のデパートでご家族をお招きし同年開催しました。今でも天国で荒川先生は「千工マーチ」の指揮棒を振っている事でしょう。

※千葉工業高校50年史から27E小原和夫氏「音楽活動と荒川一郎先生を想う」より引用

工業高校に俳句部が！！

シリーズ1

鎌形 武久 (33C)

3年生になった時、職員句会より生徒への働きかけがあり、私が生徒の中心になって、職員句会に参加した。職員句会の三羽鳥は成田先生、阿部先生、矢尻先生で、高浜虚子の高弟で「春蘭」を主宰している林蓼雨先生に師事していた。阿部先生は生徒の俳句同好会の顧問的な存在で、私達の未熟な俳句の添削をこまめにしてくれた。

昭和32年の文化祭での生徒の特選を頂いた
私の句

『大利根の 大夕焼けの 赤とんぼ』

も先生の添削で、壮大なスケールの見事な句となった。

卒業にあたり、職員句会や阿部先生の意向を感じ、私の役目として俳句同好会を「部」に昇格させるため、休み時間を利用してすべてのクラスを回り、部への昇格の署名をお願いし、生徒会で「俳句部」設立を提案し承認された。私は後輩の香取準一君を俳句部長に指名し卒業した。

そして昭和33年4月から千葉工業に全国でも極めて稀と思われる「俳句部」が発足した。

卒業後も数年間俳句を続け、「春蘭」「若人」「社会人」「雪解」「ホトトギス」等に投句した。社会人での特選には3回入選したが、その中の句を。

『田草取り 終へし一家の 舟帰る』

ホトトギス 昭和33年11月号

『ラジオ聞き 居りしが昼寝

して居りぬ』

高浜虚子選 (私が19歳の時)



(写真は阿部先生と俳句同好会のメンバー、前列左端が筆者)

シリーズ2

布施 茂勝 (38M・第5代俳句部長)

昭和37年の11月に俳句クラブ誌“まど”第4号を編集・発行することにより、私のクラブ活動が実質終了した。

その3年前に私が入部し、更に3年前に俳句同好会が発足していたが、入部した時は少人数で歴史の浅いクラブだった。私の入部の条件は活動時間が少ないことが必須だった。何故なら青果商の長男だったため、下校後は家の手伝いが待っていたからである。

1年生時は俳句で使われる語句と言い回しがなかなか理解できず、五七五と季語を覚えたのみだった。2年生時はありのままの描写で深みのない句であり、句会では殆ど選んでもらえなかった。

毎月1回の校内句会は、外部から林蓼雨先生他数名のご年配の俳人、成田先生、阿部先生他4～5名の先生方、そしてクラブ員5～6名、総勢15名程で、選者無記名互選の方法で開かれた。また吟行と称して養老溪谷や鹿野山に句材を求めて出かける等、結構活発な活動を行いながら腕を磨いていった。

一番の思い出は先輩の送別句会と称して2月に、荒波の聞こえる九十九里の一の宮「松濤閣」で一泊の吟行会を行ったことである。林蓼雨先生と外部の三代川花風さん、顧問の先生方と共に、3度程句会を行ったが、その中から印象に残っている3句を紹介する。

『俳諧を 余技とし学び 卒業す』

三代川 花風さん

『丹前に 千鳥の夢を 結びけり』

屋代 城月先生

『水温み 早くも三とせ 過ぎにけり』

家村 実先輩

3年生になり、力不足ではあるが俳句部長を拝命し、年2回の校内生徒俳句募集を行ったが、毎回10名前後の投函があり、千葉工生には旺盛な文学意欲があるのではないかと感じていた。また私が卒業するときには部員は15名に増えており、先々に俳句部の歴史の光が見えてきていたように感じていた。

最後に拙作ながら私の句を紹介し、この稿を閉じることにする。

『ストーブを 囲みて春を 待つ話』



写真は我々が3年の時の松濤閣での送別吟行、先着した3年生と先生方<中央が、成田先生、左端が林蓼雨先生、生徒の左端が筆者

シリーズ3

藤井 孝 (42M)

高校進学目的も良く考えず、ただ働く事を優先し工業高校を選択したのである。就職先も選択肢の多い機械科を選んだのである。専門教科は初めて聞く言葉に悩まされ機械実習ではもの作りを身体で受け止めるという心と体のバランスが問われている。聞くもの見るものただ驚くばかりでした。

専門性を選択した訳だから当然、機械発明創作部に籍を置き活動をしました、文化祭の時何気なく展示準備をしていた俳句部を覗いたらクラスメイトの高木君に『手伝ってくれない』と言われるままに手伝いをした。短冊を飾り終えて、一句ごと想い描きながら声を出して詠んで行くと不思議な気持ちを持った事を思い起こしました。この時が俳句との出会いであった。

月例の句会に参加しました。句会には顧問の先生方、外部の同人の諸先生、千工生合同で選句を行いました。千工生は特に同人の先生方から選句また添削して頂くのを励み喜びにしていました。

私にとって句会参加は、化学科の先輩岩井洋子さんに会えると言う胸ドキがありました。それは定例句会に気分が優れないので参加しないと伝えたら岩井先輩が突然現れて『藤井君、私の顔を見たら治ったでしょう。直ぐ句会に参加しましょうね』と言われ、的を突かれ恥ずかしいやら嬉しいやらで胸のと

きめきが頭までもポーとした不思議な気持ちになった事を思いお越しました。

2年後の暮れ、千葉駅でバッタリ会い学生服の私にお寿司をご馳走してくれました。こんなにも未だに私の胸を熱くするのは俳句なのか？いやまた岩井洋子さんなのか？それはともかくとして、句会の当日図書館の窓から眺めた校庭の風景を句に詠んだ。

『人去りて ただ一面の 落花かな』 たかし

この句は同人主宰の林蓼雨先生はじめ諸先生から『これ生徒さんの句ですか？良いですね』と言う話を頂いたことが今幸せを感じつつ人の出会いの縁は不思議な夢の継続へとまた歩み始めている。

